

令和5・6年度大島地区指定「指導方法改善」研究協力校
令和6年度 沖永良部秋季教育研究大会

【研究主題】

学習者主体の授業づくりによる伝え合う力を高める児童の育成
～ 子供の事実を基にした省察を通して ～



はじめに

校長 西 啓亨

学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、学習者主体の授業へと改善を図り、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実することが重要であると考えます。

その一方で本校は、対外的な諸学力調査において県や国の平均を大きく下回る状況にあったことから、学習の原点である授業に立ち返り、学力定着に係る当事者としての責任に正対し、学習者である児童の視点で授業改善に臨むこととした。

そこで、令和5年度から「児童の事実に学ぶ研究授業・授業研究の在り方」を研究の軸として、1単位時間での学びやつまづきを、児童の言動や変容から把握する方法を探ってきた。

具体的には、授業では児童の姿を詳細に観察し、授業研究では、児童が「どう学んでいたか」「何に困っていたか」等を分析してきた。そして、事前の手立てを検証し、以後の手立てに反映させてきた。

このように本研究は、授業者の何を変えることで児童の学びがどう変化するかを追究し、1単位時間ごとに完結する確実な学びを目指すものである。

令和6年10月30日(水)
知名町立下平川小学校

1 研究の視点

研究全体を通じて、次の5つを視点とした。

- (1) 子供の事実を基にした省察
- (2) 言葉による見方・考え方をはたらかせるための工夫
- (3) 自分の思いや考えを深めるための工夫 (R5)
- (4) 自分の思いや考えを伝えるための工夫 (R6)
- (5) 学びに向かうための工夫

2 学力の状況 (研究開始時)

R5全国学力・学習状況調査

| | 国語 | | 算数 | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| | 正答率 | 比較 | 正答率 | 比較 |
| 本校 | 56% | | 47% | |
| 本県 | 67% | -11 | 61% | -14 |
| 全国 | 67% | -11 | 63% | -16 |

3 目指す児童の姿

前述の研究の視点を受けて、児童の姿で成果を検証するために、期待される学びを達成している状態を、児童の具体的な姿で想定し、学年ごとに系統立てて自校化した。

- (1) 言葉による見方・考え方をはたらかせているとは、児童のどのような姿か

| | | | |
|------------|---|------------------------------------|---|
| 目指す姿 | ・ 対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることができる姿 | | |
| 目安となる児童の言動 | 【低学年】 ・ <u>まず、つぎになどの言葉を使って話す</u> | 【中学年】 ・ <u>文章中の言葉を根拠にして説明する</u> | 【高学年】 ・ <u>筆者の考えを文章から抜き出し、自分の言葉で説明する</u> |

- (2) 自分の思いや考えを深めているとは、児童のどのような姿か

| | | | |
|------------|---------------------------------------|---|---|
| 目指す姿 | ・ 根拠や理由をもとに自分の考えをもつことができる姿 | | |
| 目安となる児童の言動 | 【低学年】 ・ <u>順序を表す言葉をもとに自分の考えをもつ</u> | 【中学年】 ・ <u>段落の大事な語や文をもとに自分の考えをもつ</u> | 【高学年】 ・ <u>筆者の考えや資料の情報をもとに自分の考えをもつ</u> |

- (3) 自分の思いや考えを伝えているとは、児童のどのような姿か

| | | | |
|------------|---|--|---|
| 目指す姿 | ・ 自分の考えを相手に分かりやすく表現したり、友達の考えに耳を傾け、互いの考えの違いに気付いたりすることができる姿 | | |
| 目安となる児童の言動 | 【低学年】 ・ <u>自分の意見を、理由を添えて、順序正しく相手に分かるように伝える</u> | 【中学年】 ・ <u>お互いの考えの共通点や相違点に着目して考えをまとめ、友達に伝える</u> | 【高学年】 ・ <u>自分の考えと友達の考えを比較したり、関連付けたりして考えを広げ、伝える</u> |

- (4) 学びに向かっている児童とは、どのような姿か (参照：県「『学習者主体の授業』の提案」)

| | | |
|------------|---|---|
| 目指す姿 | ・ 問題発見力や自己調整力、協働する力・関係調整力、省察力、自尊心、粘り強さを学習に合わせて発揮することができる姿 | |
| 目安となる児童の言動 | 問題発見力 | ・ 当事者意識をもって問いを見いだそうとする |
| | 自己調整力 | ・ 学びの見通しをもち、自ら学びの方法を選択・決定し、学びを調整しながら実行しようとする |
| | 協働する力・関係調整力 | ・ 分からないところやできないところは、他者と協力し合い解決しようとする ・ 対話を通して対立やジレンマを乗り越えようとする |
| | 省察力 | ・ 分からなかった点やできなかった点を見直し、次に生かそうとする |
| | 自尊心 | ・ 自分の「伸び」を実感し、自分のよいところを認め、次の学習につなげようとする |
| | 粘り強さ | ・ 問いに主体的に、粘り強く学び続けようとする |

4 研究の実際 (1) 子供の事実を基にした省察

ア 事前の準備と本時案の研究

本時のねらいが達成できた姿を、児童の言動で具体的に想定し、個々に設定した。指導案では、児童の実態や予想されるつまずき・そのための個別の手立て・本時の学習で期待される姿を明記した。

| | AA児、目児、C児、D児 | BB児、F児、G児、H児 | CC児、I児、K児 | DD児、M児 | 主な対応 |
|----------|---|---|--|--|------|
| 授業前の実態 | 【主観性】 - 内容の理解が深く、自分から進んで発言しようとする。 【考えを伝える】 - 積極的に自分の考えを友達に伝えることができる。 - 教科書の文を基に、自分の考えを分かりやすく説明できる。 | 【主観性】 - 自分の考えに自信をもつと、進んで発表することができる。 【考えを伝える】 - 話し合う内容や視点を考えると、話すことができる。 - 自分の考えに自信がもてないときがある。 | 【主観性】 - 一歩指示の後、指示を理解できていないときがある。 - 活動までに時間がかかる。 - 自信をもつと、進んで活動できる。 【考えを伝える】 - 話し合う内容や視点を考えると話すことができるが、内容がずれてしまうことがある。 | 【主観性】 - 活動に対して、主体的に限り参加している。 - 指示を理解できておらず、迷うときがある。 【考えを伝える】 - 自分の考えに自信をもてないときがある。先生と一緒に伝えることができる。 | 導入 |
| 本時案での手立て | 【主観性】 - ワークシートを活用して、たんばびの知識に対する自分の思いや考えを書かせる。早く終わったら、他の知識についても挑戦するように指示する。 【考えを伝える】 - 話し合う視点を考えることで、考えを分かりやすく伝えたり、友達に書き方を教えたりできるようにする。 | 【主観性】 - ワークシートを活用して、たんばびの知識について、正しい文章で書くことができる。 - 他の知識についても書こうとする。 | 【主観性】 - ワークシートに例を書けばよいから、確認してから活動する。 - 友達や先生と一緒に考えることで、自信をもたせる。 【考えを伝える】 - 教科書の全文を活用し、たんばびの知識やわけをすぐに見つけられるようにする。 | 【主観性】 - 関心物や教科書の全文、ワークシートを活用し、自分の考えがもてるようにする。 - 困っている様子が見られたら、個別に対応する。 | 展開 |
| 授業案で目指す姿 | 「たんばびの知識」「わけ」「思ったこと」について、正しい文章で書くことができる。 - 他の知識についても書こうとする。 | 「たんばびの知識」「わけ」「思ったこと」について、正しい文章で書くことができる。 - 他の知識についても書こうとする。 | 「たんばびの知識」「わけ」がどこに書いてあるか分かり、「思ったこと」も自分の言葉で書くことができる。 | 「たんばびの知識」「わけ」がどこに書いてあるか分かる。「思ったこと」を正確に確認しながら、書くことができる。 | 終末 |

本時のねらいに対する児童の実態
本時で予想されるつまずき

そのための個別の手立て

本時の学習で期待される姿

「大島モデル」授業充実の3ポイントを踏まえた
導入・展開・終末の対応

イ 1 単位時間の検証の在り方の研究

児童の姿で成果を検証するために、授業研究の在り方を次のように改めた。

| | 一般的な内容 | 本校が目指す内容 |
|---------|---|--|
| 参観の視点 | ○ 指導案の流れ、授業者の指導法、本時でのかわり ○ 児童のまとめ、成果等 | ☆ 児童の姿 つぶやき、試行、発言、行動、書き取り等 |
| 参観者の立場 | ○ 授業者の指導の観察・記録 ○ 児童全体の観察・記録 | ☆ 役割分担 Aさんの姿を追う…等 |
| 授業研究の話題 | ○ 授業者の反省 ○ 指導案の内容 ○ 本時の流れ | ☆ 児童の姿 Aさんは、導入で… ○○の発表で… |
| 分析の観点 | ○ 本時のねらいが達成されたか (授業者の視点で) ○ 達成できた児童が○人、 達成できなかった児童が○人、など | ☆ 本時のねらいが達成されたか (児童の視点で) ☆ Aさんは、…できた。 ……が…だった。 |
| 以後への還元 | ○ 指導の在り方 ○ 教材分析 ○ 個に応じた指導法 ○ 次時の改善点など | ☆ 児童への手立て Aさんには、□□の場面で▽▽の補助資料を添えて、自力解決できるようにする。 ○○な児童には、◇◇の場を設けて…を伸ばす。 |

4 研究の実際（2）言葉による見方・考え方を働かせるための工夫

ア 見方・考え方を意識化させる

児童の見方や考え方を可視化するために、「初め・中・終わり」や「問い・答え」などのカードを板書やワークシートに用いた。

また、終末の言語活動の際に、自分が読んで感じたことを「初め・中・終わり」を意識してまとめさせた。（写真1）

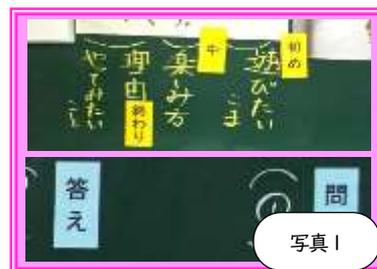


写真1

イ 見方・考え方を顕在化させる

考える視点を明らかにさせるために、モデル文や視点を絞った教材文を提示した。発問での揺さぶりや、自分の考えの根拠を本文や資料と関連付けて見つけさせる学習を行った。（写真2）



写真2

ウ 叙述を根拠に考える

根拠となる叙述に線を引かせ、叙述を基に考えや理由を話し合わせることで「言葉による見方・考え方」をはたらかせて考えさせた。

また、説明文の構成を理解することができるシートを学年ごとに作成し、「学習に用いる言葉」を手掛かりとさせた。（写真3）



写真3

【授業研究のまとめから】思考の過程を視覚化して提示することで、理由を添えて自分の考えを述べたり、文の構成や筆者の考えを理解したりする児童が増えてきた。

4 研究の実際（3）自分の思いや考えを深めるための工夫

ア 自分の思いや考えをもつための課題や導入

児童が解決したいと思うような必然性や面白さのある課題を設定した。また、選択・判断の場面を意図的に設定した。（写真4）

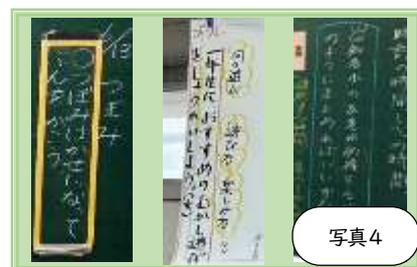


写真4

イ 学び合いの場の充実

一人で考える、友達と考える、授業者と考える、タブレットを活用するなど、追究の方法を選択できるようにした。（写真5）

友達と考える

タブレットで共有



写真5

ウ 考える時間の確保

児童の理解度に応じた手立てを準備し、ワークシートやタブレットなどの選択肢を設けて、児童が自力追究する時間を確保した。

（写真6）

ワークシート

ロイロノート



写真6

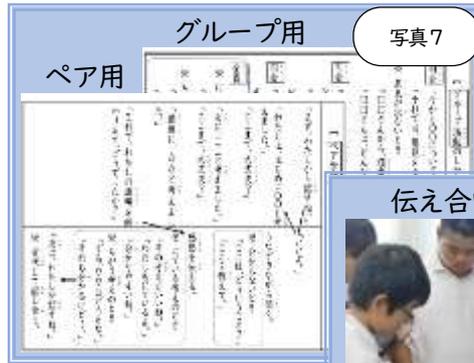
【授業研究のまとめから】自分の考えをもたせるために、児童が選択する場面を多く設定した。選択することで新たな考えが生まれ、更にその理由を考えることができた。

4 研究の実際 (4)

自分の思いや考えを伝えるための工夫

ア 話し合いを深めるための言葉の活用

基本的な話し合いの流れを示したカードを活用し、相手の考えを聞いて質問や反応を返すための手助けとした。また、教科書の「たいせつ」の活用も行った。(写真7)



イ 伝え合う場の流れと場の設定 (写真8)

- (ア) 考えを生み出す
- (イ) 考えをもとに伝え合い、話し合う
- (ウ) 友達の考えを基に自己内対話を行う
- (エ) 自分がどのような力をつけたのかを振り返る



ウ 「すくーる373る」の活用

主に高学年で、「すくーる373る」の「新聞を読む」や「ワークシート」を活用し、考えを伝え合う活動を行った。(写真9)



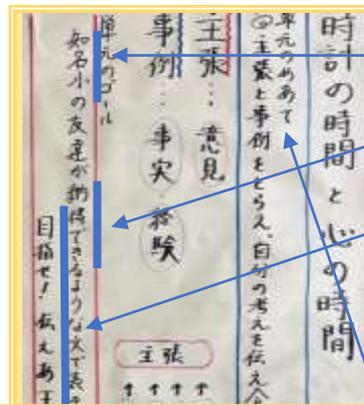
【授業研究のまとめから】話し合いの型を示すことで、始めは何を伝え合えばよいか悩んでいた児童も少しずつ交流を楽しむようになってきた。今後も様々な発言、話し合いを価値付けていきたい。

4 研究の実際 (5)

学びに向かうための工夫

ア 児童に学びの当事者意識をもたせる

単元のゴールイメージを共有させ、児童の問いや達成したい課題から単元の学習計画を立てさせた。また、作成した学習計画を常に掲示し、児童がいつでも振り返り、見直しをもてるようにした。(写真10)



- ① 相手意識
知名小学校の6年生と交流する
- ② 目的意識
相手に納得してもらうために書く
- ③ 場面意識
他校との交流を目標にする
- ④ 方法意識
ロイロノート
- ⑤ 評価意識
単元のめあてに明記

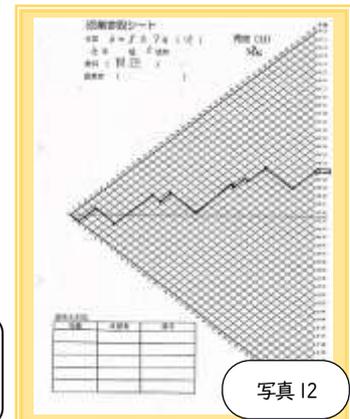
イ フローチャートと振り返りカード

授業の基本的な流れや、児童と授業者の動きをフローチャート化して掲示した。また、振り返りカードに授業者からのコメントを返すことで、次の学びへの意欲をもたせた。(写真11)



ウ 授業の時間配分の可視化

指導時間と児童の学習時間を、1分ごとにグラフ化した。(写真12)



【授業研究のまとめから】児童の学習時間を十分に確保し、児童が解決の方法を自分で選択・判断し、学びを振り返らせることが効果的であった。

5 成果と課題

1 標準学力検査結果NRT（国語）

| | R4 | R5 | R6 |
|----|------|------|------|
| 2年 | 44.7 | 43.8 | 49.1 |
| 3年 | 53.1 | 43.4 | 46.0 |
| 4年 | 47.4 | 50.5 | 44.5 |
| 5年 | 41.6 | 46.1 | 51.4 |
| 6年 | 52.1 | 43.1 | 45.4 |
| 全校 | 47.7 | 45.3 | 47.2 |

2 児童アンケート

| 4段階評価 1：できていない～4：できている | 5月 | 7月 |
|---------------------------|-----|-------|
| 1 言葉による見方・考え方をはたらかせているか | 2.8 | 3.2 ↑ |
| 2 自分の思いや考えを深めているか | 3.0 | 3.2 ↑ |
| 3 伝え合う力を高めているか | 3.4 | 3.2 ↓ |
| 4 学びに向かっているか | 3.2 | 3.3 ↑ |

3 R6全国学力・学習状況調査

国語・算数ともに、県及び全国を大きく下回る結果であった。昨年度との比較では、1～2ポイントの向上であった。

また、学習状況調査で、本校児童が本県の平均と比べて顕著な傾向が見られたのは、主に次の項目である。

（本研究に関連する設問から抜粋・要約）

- ◎ 総合的な学習の時間では自分で課題を立てて学んでいる。（+9.5）
- ◎ 話し合いを生かして、今、努力すべきことを決めている。（+7.1）
- ▼ 授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考える。（-18.2）
- ▼ 授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に課題を解決している。（-9.9）

| | 国語 | | 算数 | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| | 正答率 | 比較 | 正答率 | 比較 |
| 本校 | 58% | | 50% | |
| 本県 | 69% | -11 | 62% | -12 |
| 全国 | 68% | -10 | 63% | -13 |

4 職員アンケート

| 10段階評価（1：できていない～10：できている） | | 5月 | 7月 |
|----------------------------------|------------------------|-----|-------|
| (1) 言葉による見方・考え方をはたらかせている児童の姿について | ① その達成のための授業に取り組んでいるか。 | 5.0 | 6.7 ↑ |
| | ② 児童の姿は変わったか。 | 5.1 | 5.9 ↑ |
| (2) 自分の思いや考えを深める児童の姿について | ③ その達成のための授業に取り組んでいるか。 | 5.7 | 7.0 ↑ |
| | ④ 児童の姿は変わったか。 | 4.8 | 6.2 ↑ |
| (3) 伝え合う力を高める児童の姿について | ⑤ その達成のための授業に取り組んでいるか。 | 5.0 | 6.7 ↑ |
| | ⑥ 児童の姿は変わったか。 | 4.8 | 6.3 ↑ |
| (4) 学びに向かう児童の姿について | ⑦ その達成のための授業に取り組んでいるか。 | 5.6 | 7.3 ↑ |
| | ⑧ 児童の姿は変わったか。 | 5.0 | 6.4 ↑ |

5 成果と課題

(1) 成果

- ◎ 各学年の「目指す児童の姿」を意識して指導することで、児童の自己評価が向上した。
- ◎ 児童の姿を基にした検証の方法や分析の視点について考えることで、授業者が主役の授業から、児童が主役の授業へと教員の意識が変化してきた。
- ◎ 個別の実態や個に応じた手立て、期待される姿を明らかにした指導案の型を自校化し、PDCAによる修正・改善・検証を重ねて自校化を進めることができた。

(2) 課題

- ▼ 対外的な学力調査や検査等で、顕著な改善・向上等が見られなかった。
- ▼ 他者との考えの共通点や相違点を見つけ、話し合いを深める力が十分に育っていない。
- ▼ 単元のゴールの設定や、学びの場の設定などの、児童がより主体的に取り組める授業づくりが未だ改善の途上にある。